



中西 理奈	
また遇える世界 ～安心を頂くお念仏～	1
深水 顕真	
最強の救い、本物の救い	11
中川 醇誓	
摂取して捨てざれば	21
普賢 保之	
秋彼岸	31

本文中、『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』は『註釈版聖典』と略記しております。

表紙絵・挿絵／羽尻利門

また遇^あえる世界 ～安心を頂くお念仏～

中西 理奈

「おばあちゃんが浄土へ還^{かえ}りました」

昨年、お彼岸の最中に実家から連絡がありました。祖母とは「また来るね」と言っ^て別れたのが最後です。

私は僧侶であり、中学校と高校の宗教科の教員でもあります。その為、いのちのほかなさは常々考え、生徒たちにも伝えてきました。しかし、この「また」という言葉だけはど^んでも使^ってしまいます。「また」と言^ったまま祖母と今生の別れを迎えたら、きっと後悔する、そう思^って

過ごしていた矢先のことでした。

私は大学への進学を機に、佐賀県にあるお寺から京都に出てきました。そのまま京都で就職し、京都で出会った方と昨年、結婚しました。しかしこれが親泣かせな話で、十八歳の時に実家を出て以来、帰るのは長期のお休みが取れた時くらいです。数少ない帰省のたびに、家族は温かく迎えてくれて、お金に困ってはいないか、ちゃんと食べているかと心配をしてくれます。特に私の帰省を心待ちにしてくれるのが、お寺と一緒に住む前坊守である祖母です。帰るたびに、「元氣そうで良かった」と涙を滲ませてくれました。

誰にでも優しく、背筋をピンと張ってたくましく生きる祖母は「坊守」という言葉にふさわしく、お寺のことをいつも考えている人でした。ご

門徒さんからも親しまれ、朝夕のお勤めは欠かさず行い、時間さえあれば境内の掃除をしていました。本堂にお供えするお花や荘厳への思いが強くと、そこには参拝する方に、阿弥陀さまのお心やお念仏のみ教えに出遇ってほしい、そんな願いが込められているように感じました。また、仏教の本もよく読み、よく聴聞をする祖母を見ては、「熱心だなあ」と思ったものです。

私が小学校五年生の時に祖父が亡くなって以来、私と祖母は同じ布団で寝るようになりました。最初は、祖父を亡くした悲しみが癒えない祖母を一人にしないようにと、一緒に寝るようになったのですが、いつしか私の方が祖母なしではいられなくなりました。

祖母と同じ布団で寝るようになってからは、祖母の部屋は私の部屋も

同然です。高校を卒業するまで、私は祖母の部屋で祖母と多くの時間を過ごしました。祖母はいつも私のことを気にかけてくれ、時には小言も言いました。対して私は、反抗期にきつく当たったこともあります。祖母はいつも受け止め、どんな話でもよく聞いてくれて、「理奈ちゃんが結婚するまでは、死ねんばい」と口癖のように言っていて笑っていました。

そのような中で、気になったことが一つだけあります。それは、祖母



がよく、「南無阿弥陀仏」と称えていたことです。お風呂に入ってもナンマンガブ、トイレに入ってもナンマンガブ、寝言でもナンマンガブ…。夜中に聞こえてくるナンマンガブには、恐怖さえ覚えたものです。昔、ナンマンガブと称える祖母に、称えて何になるのかと問うと「温かい気持ちになるよ」と返されたので、私は祖母と一緒に「ナンマンガブ」と称えながら寝ました。祖母と一緒にナンマンガブと称えると、今まであった恐怖はどこかに消え、なぜかほっとしたのを今でも覚えています。そんな祖母がくも膜下出血で倒れたのは、今から六年ほど前のこと。当時大学生だった私が病院に行った時には、一命をとりとめた祖母が静かに眠っていました。このまま一生目を覚まさなかつたらと嫌な気持ちがあがり、突然突き付けられたいのちのはかなさに、現実を見ていな